

2016.7 No. 34



佐賀大学病院ニュース

患者・医療人に選ばれる病院を目指して

News & View

〒849-8501 佐賀市鍋島五丁目1番1号

TEL 0952-31-6511(代)

病院ホームページ <http://www.hospital.med.saga-u.ac.jp/>

新病院長 就任挨拶



病院長 山下 秀一

平成28年4月1日から佐賀大学医学部附属病院長を務めることになりました山下秀一です。佐賀県唯一の大学病院として、地域医療の中核としての役割を果たす責任と県民の皆様の期待をひしひしと感じています。微力ながら、「患者・医療人を選ばれる病院を目指して」という病院理念を絶えず念頭に置き、病院の3つの目標である、地域医療への貢献、良き医療人の養成、高度医療技術の開発研究、を果たすためのコーディネーターとなるように努力する所存です。

職員の方々の努力により、年間の外来患者数は優に20万人を超え、入院患者数も延べ20万人に近づきつつある本院は、佐賀県の医療の最後の砦として、全国のどの施設にも負けない高度な急性期医療を地域の皆様に提供してきました。今後も職員一丸となって、再整備で充実した手術室や集中治療室等の最新の設備を利用して、さらなる向上を目指したいと考えています。皆様のご指導とご協力の程心よりお願い申し上げます。

副病院長就任挨拶



安全管理・中期計画担当 木村 晋也

平成28年4月から2期目の安全管理・中期計画担当副病院長に任命いただきました。安全管理は、患者さんと医療者を守る大切な部門です。365日、24時間、院内で発生した問題に対処しなければならず、大変ですがやりがいもあります。中期目標・中期計画は、今年度から第3期に入りました。大学や病院をより良いものにしていく基礎となります。できる限り皆様のお役に立てるよう頑張りますので、ご協力をお願いいたします。



経営企画担当 能城 浩和

平成28年4月1日付けで経営企画担当副病院長を拝命しました。これまで病院長特別補佐を務めさせていただき、病院執行部2期目になりましたが、今回の役割は病院経営という最も重要な根幹に関わる大役と心得ております。平成26年度の経営不振の改善において痛みを伴う改革が進められていますが、病院職員一同の認識と努力によってのみ改善が達成されますので、引き続きご協力を心からお願い申し上げます。



卒後臨床研修・再整備担当 倉富 勇一郎

平成28年4月1日付けで卒後臨床研修・再整備担当副病院長を拝命しました。医師としての第一歩である卒後臨床研修は、「病める人の苦しみを共感できる心を育み、良き医療人を育成」するために大きな意義を持っています。より良い研修システムや研修環境を提供できるように努めてまいります。研修の充実には各診療科の指導医の先生方やスタッフの方々のご指導が何より大切ですので、どうぞよろしくお願いいたします。



医療業務担当 藤満 幸子

平成28年4月1日付けで医療業務担当副病院長及び看護部長に就任いたしました。今後、地域包括ケアシステムの推進に向け、本院は高度急性期を担う病院として期待されています。医療・ケアと生活が一体化した地域完結型の体制を鑑み、患者さんやご家族の方には、より安全で信頼できる診療及び療養サービスの向上に努めていきたいと思っております。また、複雑化・多様化している病院業務の改善を図り、病院スタッフが「働きがいがある病院づくり」に努めますので、皆様のご協力・ご支援の程よろしくお願いいたします。

本院オリジナルなバイオバンクがスタートします

メディカルバイオバンクセンター長 教授 末岡榮三朗



「バイオバンク」は、患者さんが検査のために提供された血液や組織を取って、検査技術の開発や治療法の開発のために有効利用しようとする取り組みです。ほとんどの病院では、検査のために預かった検体は、必要な検査を終えた後、組織の一部を除いてほとんど廃棄されています。これではせっかく患者さんが痛い思いをして提供された検体の価値が十分生かされたとはいえません。本院では、保存された検体の情報から患者さん個人のプライバシーが侵害されないよう対策をとりつつ、将来の佐賀県の医療に貢献できるようなバイオバンクにするため、最新の設備とシステムを作りました。その一つは、検体の出し入れや保管をロボットアームが自動で行うロボット倉庫を導入したことです。もう一つは、検体の出し入れを電子カルテの情報を見ながら操作できる自動化システムを独自に作り上げたことです。このような本院のバイオバンクシステムは日本初の先進的な取り組みです。これからの医療は、これまで治療が難しかった患者さんをいかに救うかに力が注がれていきます。そのためには多くの患者さんや病と闘ってこられた貴重な記録と大切な検体を用いて新しい治療薬の開発や早期診断法の開発のための技術や機器の開発が不可欠です。本院においても、全国の研究機関や病院と連携して、患者さんにやさしく、治療効果の高い治療を実現するために、今回整備したバイオバンクを有効に運用していきたいと考えています。

「バイオバンク」は、患者さんが検査のために提供された血液や組織を取って、検査技術の開発や治療法の開発のために有効利用しようとする取り組みです。ほとんどの病院では、検査のために預かった検体は、必要な検査を終えた後、組織の一部を除いてほとんど廃棄されています。これではせっかく患者さんが痛い思いをして提供された検体の価値が十分生かされたとはいえません。本院では、保存された検体の情報から患者さん個人のプライバシーが侵害されないよう対策をとりつつ、将来の佐賀県の医療に貢献できるようなバイオバンクにするため、最新の設備とシステムを作りました。その一つは、検体の出し入れや保管をロボットアームが自動で行うロボット倉庫を導入したことです。もう一つは、検体の出し入れを電子カルテの情報を見ながら操作できる自動化システムを独自に作り上げたことです。このような本院のバイオバンクシステムは日本初の先進的な取り組みです。これからの医療は、これまで治療が難しかった患者さんをいかに救うかに力が注がれていきます。そのためには多くの患者さんや病と闘ってこられた貴重な記録と大切な検体を用いて新しい治療薬の開発や早期診断法の開発のための技術や機器の開発が不可欠です。本院においても、全国の研究機関や病院と連携して、患者さんにやさしく、治療効果の高い治療を実現するために、今回整備したバイオバンクを有効に運用していきたいと考えています。



▲バイオバンクのしくみ

就任 挨拶



循環制御学講座 教授 尾山 純一

平成28年4月1日付けで循環制御学講座の教授に就任しました尾山純一です。3年前に就任した先端心臓病学講座(寄附講座)の任期を終え、今回講座名も変わり再出陣いたします。

本講座では、睡眠時無呼吸症候群や慢性心不全に対する非薬物療法、特に補助呼吸療法や遠隔モニタリングを用いた在宅診療、ペースメーカー治療及び管理と研究を行ってまいります。

睡眠時無呼吸症候群は特殊な病気ではなく、日本では全人口の4%と言われており、推計200万人の重症患者が存

在しているとされていますが、そのほとんどが未治療のままです。そのような患者さんを、早期から治療することで最終的にはQOL及び予後の改善を目指しています。また、在宅診療や予防を目指した心臓リハビリテーションや在宅モニタリング、さらに、医用工学機器を用いた診療と、将来の可能性を見据えた診療や研究が行われています。是非、学生や先生方に興味を持っていただき、一緒に頑張りたいと考えています。

新病院長・副病院長就任挨拶

本院オリジナルなバイオバンクがスタートします

末岡榮三朗 就任挨拶

尾山 純一

診療科紹介 神経内科

診療科長
原 英夫



私達神経内科は、日本神経学会専門医5名を有し、県内随一の総合的かつ専門性の高い診療を通じ県民の皆様を神経疾患から守ることを使命としています。私達は診療・研究のいずれも、脳血管障害、認知症、神経難病を三つの柱にしています。

脳血管障害に対しては、当科の日本脳卒中学会専門医を中心として、365日、24時間体制で対応しています。脳卒中急性期入院は国公立大学の中でトップクラスの症例数を誇り、多職種(救急科、脳神経外科、リハビリテーション科、放射線部、看護部)と連携して、脳血管センターを立ち上げ、日々診療の質の向上を目指しています。急性期の血栓溶解療法(r-tPA)も積極的にを行い、最近ではそれに引き続く血管内治療を脳神経外科のバックアップのもとで行っています。

認知症に対しては、「物忘れ外来」を開設しました。日本認知症学会専門医を中心として認知症疾患の外来診療、入院検査、治療、在宅介護、療養型入院治療ネットワーク形成などを含めたクリニカルパスを策定し総合的な治療を行っています。これらは私達神経内科のみならず、精神神経科、放射線科、認知症心理学分野の先生方との共同で行っている点の特徴です。また、平成23年12月から佐賀県認知症疾患医療センター運営事業が開始されました。本院が佐賀県の基幹センターとしての役割を担い、認知症の患者さんとご家族の方が安心して暮らせる地域医療を目指しています。

さらに、神経難病、特に筋萎縮性側索硬化症やパーキンソン病を中心とした佐賀県の神経難病支援ネットワークを構築し、佐賀県内の各地域の拠点病院と連携しながら、治療方針の決定や療養型病院での治療に対するコンサルトや助言などを行っています。



▲神経内科のスタッフ

こどもセンターの設置について

平成28年度から佐賀大学医学部附属病院6階西病棟に「こどもセンター」を開設いたしました。子どもの患者さんの診療には小児科のみではなく、救急やリハビリ、外科系など様々な診療科が関わります。こどもセンターは、各診療科の医師や関連するスタッフが患者さんを中心に十分連携して診療にあたること、小児の病床を有効に利用することを主たる目的として開設しました。それぞれの診療科の専門性を生かしながら診療科間やスタッフ間の垣根を越えて連携



こどもセンター長
教授 松尾 宗明

しつつ、子どもたちとご家族も含めたトータルケアを目指したいと思っています。今までも外科系の子どもの患者さんの鎮静が必要なMRIなどの検査は小児科医が関わって行ってきましたが、周術期の管理などにも必要に応じて小児科でサポートしていきます。こどもセンターセミナー、カンファレンスなど複数の診療科にわたる領域の研修や勉強会の機会を定期的に設けることにより、連携の促進や小児専門のスタッフの育成を図ります。患者さ

んの対象年齢は原則15歳未満ですが、障がい児や小児慢性特定疾患の対象となるような疾患については、若年成人期を含めて成人診療科へのスムーズな橋渡しを目指していきます。本院には、小児の先天異常などの分野で西日本でも有数の診療実績があります。是非この特長を生かしつつ、佐賀県の小児医療の中心としてふさわしい組織をつくっていききたいと思います。

新たなMRIの導入・更新について

平成27年12月末、手術部に新しい3テスラのMRI(SIEMENS社 MAGNETOM Skyra)を導入し、放射線部では平成28年の2月に3テスラMRI(SIEMENS社 MAGNETOM Prisma)、4月に1.5テスラMRI(SIEMENS社 MAGNETOM Avanto)を更新しました。これにより、MRI3台体制となり、MRI検査の予約待ちが緩和されつつあります。

新しいMRIでは、画質や撮像スピードが非常に向上しており、新しい撮像法も導入されています。新しいダイナミック造影MRI(TWIST-VIBE)では、画質を保ったまま数秒毎の高速撮像が可能となり、より



▶下肢 非造影MR angiography (QISS)

放射線部長
教授 入江 裕之



詳細な病変の血流動態の評価が可能です。新しいQISS法を用いた非造影のMR angiographyは、画質が向上しており、四肢などの末梢血管の評価に有用です。今後、新しいMRIを用いて臨床及び研究に貢献していききたいと思います。



▲放射線部3テスラMRI MAGNETOM Prisma

連携病院紹介

おおくま産婦人科

【病院の紹介】

当院は前医院より新築となりまして12年が経過しました。当初より不妊治療をスタートしており、現在では高度生殖医療(体外受精移植、凍結胚移植等)から妊娠出産まで妊娠全体をケアできる病院となっております。また、不妊症患者の増加に伴い、培養室の拡大や採卵室の設備増加を目的に、病院西側に不妊部門の増築が始まっています(平成28年末完成予定です)。私たちは佐賀県の不妊症患者はまず地元佐賀で治療が全てできることを目指して治療を行っています。さらに、出産に関しても増築とともに現在の病室を改装し、妊婦さんがリラックスし安心して出産できるように努力しています。

【本院との連携】

産婦人科開業医の宿命として大きな問題があります。それは、いつ来るか分から

文化コーナー作品(俳句・川柳)募集のお知らせ

本院広報委員会では、俳句・川柳を募集しています。優秀作品は3月発行の「病院ニュース」に掲載する予定ですので、皆様奮ってご応募ください。

詳細は外来ロビーの掲示板及び本院ホームページをご覧ください。

【応募締切】平成29年2月10日(金)

【応募・お問い合わせはこちらまで】

佐賀大学医学部総務課(研究・評価担当)
TEL:0952(34)3354
E-mail:khyouka@mail.admin.saga-u.ac.jp



▲院内学級の児童生徒による作品

院長 大隈 良譲

